

『出口』と書かれたゲートの先は明度の違いか白んでいてよく見えなかったが、躊躇いなく進んだのはこの先はどうなっているのだろうと気が急いでいたからだったのかもしれない。ここまでの電車の旅、そしてこはねの想いから生まれたらしき写真展……様々な発見と、謎を紐解くようにこの世界の正体を探すための思考がもたらす高揚に冬弥は胸をいっぱいにしていた。脚が思いの外早く進んだのもきつとそのせいだった。

一瞬。ゲートを潜る瞬間、明順応からくる眩しさに彼は目を瞑った。瞼の奥がチカチカと痛み咄嗟に左手で目を覆う。小豆沢は大丈夫だろうか。手でひさしを作りながら目をゆっくりと開くと滲んだ世界の中に幾本もの白線が揺蕩っているのが見えた。生理的な涙の膜の向こうで焦点が徐々に合っていく。どう見ても電車を降り白いドームに入った時の景色からはかけ離れていた。これはまるで、シブヤのスクランブル交差点のようだ――

「小豆沢、ここは一体……」

その名を呼んだのは冬弥にとってはいまにも自然なことだった。ここまで短くはない不可思議な世界の旅を二人でしてきた中で幾度となく交わした会話の一つになるはずだった。だがしばらく待てど、予想したはずの声は返ってこない。ハッと冬弥は後ろを振り返った。

「小豆沢……？」

見慣れたシブヤの雑踏が彼の目の前で蠢いている。顔も認識するより早く忙しなく歩み去っていく人々が交差する雑踏。一人、冬弥に向かって歩いてきたサラリーマンが彼の身体をすり抜けた。誰もが彼を認識していないのはきつと実在の世界ではないからだ。だが、そんなことはどうでもいい。

「小豆沢」

刹那ざわめく音が消えた。まるで伽藍堂。その場で必死に首を、身体を動かす。居るはずの相手の名前を

呼びながら。だが問いかけへの答えも姿の一つも彼が捉えることはできなかった。じわりと嫌な汗が背中に滲む。後ずさるように動いた足は段差もないアスファルトに引っかかり辿々しい。ぐらりと世界が回る。だがそれは世界が変わる合図ではない。眩暈がする程三百六十度同じ場所を何度も何度も見回しても、結果は変わらない。

「小豆沢！」

何度目かわからない、大きく叫んだ直後冬弥はついに咳き込んだ。がさついた喉に手を当てる。

こはねは自分よりもあとにゲートをくぐったはずだ。冬弥の手には、こはねの小さな手のぬくもりがまだ残っている。幾度となく重ねた手だ。あの時、あそこに入った時と同じようにこはねの手を握っていたら……眉を歪ませてぐっと冬弥は空の手を握り締めた。

「探さなければ」

ここから出る方法か、こはねを見つける方法か。ど

ちらかはわからないが、ここで立ち止まっても事態は何も好転しないことは確かだ。冬弥は細く長く息を吐きながら目を閉じた。どうにかして自分自身を落ち着かせなければならなかった。アイスグレーが瞼の内に押し込まれる。逸る心臓の音が耳の奥でぐわぐわと揺れた。

「……？」

目を開いた途端冬弥の眉が顰められる。閉じた目の暗闇の中で『何か』が見えた気がした。何か、何が

——その思いのままに自然と瞼は閉じられた。

暗闇にぼんやりと白い光が浮かんでいた。それはややあつて丸い塊のようだったのが毛糸の塊から一本を引き出すようにほどこけていく。目を閉じているのに、空間にしつかりと奥行きが感じられた。覚束無い足取りのままそちらの方へ近づいていくと徐々に輪郭がはつきりとしてくる。外から与えられる灯りのない世界でまるで自ずから光を発しているかのようなそれは

頭をもたげた。赤い水晶が鋭く光を宿す。

——白蛇だ。

冬弥はついに足元の距離までに近づいた相手を見下ろした。つるりとした鱗がその奥に星でも宿しているかの如く光り輝いていた。美しい鱗。写真越しにしか見たことのないそれを彼はよく覚えていた。

「……パール伯爵……？」

当たり前だが返事はない。冬弥はしやがみ込み、鎌首上げる蛇の視線に限りなく自身のそれを合わせた。赤い瞳の中に黒い影になって自分の顔が写っていた。見合って数秒。蛇はふっと身体ごと頭を逆に向けるとそのまま先へと向かって這っていく。ついてこいと言われている気はしなかったが、冬弥にとっては唯一の手掛かりだ。目を閉じたまま、暗闇の中光る白い蛇の後を追いかけた。

＊

目を閉じたまま歩くという行為は通常非常に危険だが、不思議と何かにぶつかってしまう恐怖はなかった。それよりもこのまま目を開けてしまったら蛇がいなくなってしまうのではという不安が勝った。どれだけ進んだだろう、どこへ向かっているのだろう。最初に見知らぬ世界に來た時にも、電車に乗り新しい場所に辿り着いた時にも感じられた新しい場所への明るい好奇心と期待は今は無い。不安、はある。だが冬弥は自身の感じるそれがこの場所そのものへの不安ではない気がしていた。だからこそ目を閉じて情報を遮断してでも前に進んでいる。

不意に蛇の動きが止まった。その場で円を描くように這い、後ろにいた冬弥に向き直った。存在は認識されていたのかと冬弥も足を止める。蛇はじっと彼の顔を見つめていた。彼の意識の外で意図せず瞼が開いていく。睫毛の間から入り込む外の光に蛇の姿が紛れ、

輪郭が滲んだ。冷たい風が一筋冬弥の前髪を揺らした。

「ここは……」

目を開くと一気に外気温が下がり随分と肌寒いように感じられた。何度かまばたきをして知覚を慣らす。木々がざわめいていた。何組か子供連れの親子が人工の小さな丘のようなところで遊んでいる。

「乃々木公園か？」

既に陽は傾きかけている。なぜこの場所に來たのか、どうやって來たのかはわからないがこの場所に何かあるのだろうか。冬弥は歩き出した。

肌を刺す冷たさは季節が冬であることを示している。少し進み開けたところで一際大きな木が現れ冬弥は足を止めた。まだ辛うじて日中だと言える太陽の傾き方とその景色に覚えたのは既視感だ。ここで以前何かがあった。だが乃々木公園には練習でもよく来ている、慣れ親しんだ場所のはずが妙に感じる既視感は一切ないのだろうか。まとまらない思考に誘われるように緩や

かに瞼が落ちていく。やって来るのは暗闇——のはずだった。

これは、と声を上げようとして冬弥は震えた喉の先が音にならないことに気がつく。だがそれよりも目の前に広がる鮮やかな景色に思わず面食らった。一瞬目を閉じる前と変わらない様子、だがそこに先ほどまでは居なかった人物の姿がある。近づこうとした瞬間、シャッターを切る音がした。一枚ではない。何枚も連続して撮られる写真のレンズの向こう。歌を歌っている時ともまた違う真剣な表情が目には焼き付く。その視線の先にある笑顔は冬弥自身何度も見、そして多くの人から評価を貰った『青柳冬弥』がいた。客観的に見るなど初めてのことだ、それに本来はこうして見ていることの方があり得ない。写真こそ自分のスマートフォンにも残っているが本当に俺はこんな顔をしているのか、と冬弥は改めて思う。それと同時にカメラを構えたこはねの表情がふっとほどけるように和らいだ。

その蕾が淡く緩やかに花開くような笑顔はこれまで冬弥が見てきた、フェニックスワンダーランドのことを楽しそうに話す時の姿とも突然現れた花畑に目を輝かせていた時とも冬弥に励まされてきたこれまでのことを思い出して嬉しそうにしていた時とも、そして手を握った瞬間の照れたようなはにかみとも違う。なんと言えば良いのか冬弥には分からなかった。けれども胸があたたかくなるような、それでいて締め付けられるような心地がした。彼の左手は自然とその胸元に伸び、ぐつと服ごと握る。皺が寄った布の奥の痛みと呼ぶには鈍い感覚は違和感となったまま取り出せもせず重く落ちていく。目の前で『自分』がこはねに向かって歩いていった。最後に見た彼女の表情はいつもの穏やかな、それでいて良い写真を撮れたことに対する高揚まじりの笑顔だった。

は、と目を開いた。場面を構成する景色だけは同じまま、そこにはこはねの姿も『当時の自分』の姿もな

い。朱く色づき始めた世界の中で冬弥はもう一度目を閉じた。どこから現れたのか、今度は暗闇の中で少し光量の落ちた白色電球のような輝きと共に白い蛇が彼の方を見ることもなく進んでいく。蛇の進むスピードなど速くはないはずが、冬弥の足取りは早足だ。それでも追いつくには至らないまま彼はただ後を辿るしかなかった。

＊

音も無く蛇が止まりとぐろを巻いた。それ以上進む気は今はないと言っているのを感じて冬弥もまた立ち止まり目を開ける。途端耳に流れ込んでくる音の奔流はあまりにも聞き馴染みがありすぎるもので彼はすぐに首を動かし辺りを見回した。

「ゲームセンター……」

地下階にあるそこは全ての筐体が良く手入れされた、

冬弥にとっても思い出深い場所だった。雑多な音楽や効果音が混ざり合った、側から聞けば雑音と言われてしまいくさな音だがそれが彼にとっては心地良い。

店内を軽く一周して辿り着いたのは新旧様々なゲームが置いてある中でも導入されてから比較的日子が浅い筐体の前だった。ああ、これを全員で遊んだことがあったなと冬弥は思出す。誕生日に何をしたいかと問われて全員でゲームセンターに行きたいと言った。快くやろうと言ってくれた仲間と、来た先で偶然鉢合わせた友人先輩達と過ごした時間が彼の中で鮮明に思い出される。機械に触れながら、冬弥はその時のことを思い返すようにゆっくりと目を閉じた。

ゲーム画面が映っている。分かれ道を選ぶのに苦慮しながら、二つのチームが制限時間に追われつつ得点を競っている。楽しそうだと、『自分』を含めた四人の後ろ姿から伝わってくる。その後ろで同じように様子を眺めている四人の姿もあった。当然だが、この時

後ろでどのように彼女達が自分達を見ていたのか冬弥は知らない。だから今見ているのはもしかしたらただの幻覚かもしれないし、あるいは本当にその時の彼女達なのかもしれない。活発であつたり控えめであつたり、個性の出る応援で盛り上がる声の中で冬弥の目に止まったのは、胸の前で手を握るこはねの姿だった。

——また、同じ顔を——？

どちらも引かぬ接戦に他の三人と同じように興奮で目を輝かせていたところから一瞬変化する目尻が下がり和らいだ表情。目線の先を追えば、『自分』が隣の相棒と話しながら笑っているのが冬弥には見えた。……誕生日、これだけ多くの人と過ごせて好きなことを共にできることが夢のようだった。ゲームをプレイしながら、勿論相棒と共に絶対に勝つという意志を持ちながらもこの時間そのものが楽しくそして嬉しいと強く思っていた記憶が蘇る。

目を開けば筐体の画面にはプレイ前にコインを入れ

ることを促す一文と宝探しに向かうトロツコが進む映像が背景として映っているだけだった。何かが掴めそうない気がした。ただ、まだ足りない。冬弥は再び目を閉じた。

＊

迷うことはもう無かった。暗闇の中でもお構いなしに蛇の後を追うために思い切り走る。蛇は前へ前へとただ進む、決して追いつけやしない距離をただひたすらに冬弥は駆ける。蛇がすうっと止まったのを見て冬弥は目を開いた。一瞬、景色が存在しないのかとを感じる。しかしそこは風の無い、ただしんと冷たい空気が夜の中で張り詰めている場所だった。天を仰ぐと星が点々と瞬いている。北斗七星の位置はあの時も今も当然変わらなかった。

瞼の奥で見える景色は懐かしい。火が燃えている、

その周りには串に刺さったマシュマロが添えられている。一部焦げてしまったものを見て数人が慌て出した。あれだけ悩んだことが嘘のように四人美しく揃った歌と自分にしかできないことをようやく掴めた自信、そして仲間と経験や思いを共有するという経験。『自分』は笑っていた。生涯その日のことを忘れないだろうと心に刻んだ瞬間だ。そして探さずとも側には皆がいる。

最初に冬弥が見つけたのは想像していたこはねの表情とは違った。他の二人が『自分』を見て嬉しそうに笑う中で彼女だけが目を丸くしていた。驚きに近い表情だったと思う。そしてそれから薄茶の瞳はゆるりと細められた。これまでこのセカイで見てきたもの限りなく近い表情だった。

『テントを立てたり、野菜を切ったりしてる時の青柳くん、すごく楽しそうだったよ』

先程見たばかりの景色と記憶も同時に思い起こされる。笑顔の写真を撮りたいとこはねが言ったとき、自

然な笑顔を作るための助走として最初に彼女が選んだエピソードはこのキャンプでの出来事だった。この記憶が、冬弥にとって宝物のような記憶であることは間違いない。……ならば、こはねにとっては何？

＊

すぐ目の前に蛇がいることに冬弥は驚いた。先程まではどんなに走っても追いつかなかった存在。だが赤い瞳は決して冬弥の方を見ようとはしなかった。すると這っていくのを隣に並びついていく、だが暫く歩いた先で長い身体が仄かに淡い桃色に変化していくのが見えた。一体何が、と思う間に蛇——パール伯爵は尾の先からひらひらと薄い鱗一枚一枚を暗闇の中に散らしていく。身体は残らないまま、輝きを保ったまま鱗が辺りを舞う。何が起きたのかと思わず手を伸ばし掴もうとしたが、蛇の姿はついに消え去った。後に

残る暗闇が肌を覆いじわりと全身に汗が滲む。目を開けてしまおうか、だがここが何処なのか何処かに辿り着けたのかも分からない。案内者はいなくなってしまった。これからは自分で決めなければならない。手を握り込んだまま、冬弥は一度強く目をつぶり直すとゆっくりと目を開いた。

あたたかい空気の中で一陣の風が頬を掠めた。同時に視界が桃色で埋め尽くされる。目を細め嵐をやり過ぎすと目の前には満開の桜の巨木があった。記憶の蓋が開く。初めての花見、ユニットの仲間全員で過ごした時間。何処からか四人で歌う声が聞こえて来る気がした、だがこれはきつとこの世界が冬弥に伝えたいことではない——アイスグレーはそっと閉じられた。

次の瞬間彼の前から桜の木は消えていた。どういうことだろうか冬弥が周囲の様子を探るとささやかに遊具がいくつかある程度の空き地のような公園、つまりはここがいつも練習に使っている公園であることが

分かる。その入口付近で四人の男女が話していた。

『自分達』だ。空は夕焼けに色づき、既に彼等が歌い終わった後だということがわかる。冬弥は近づき彼等の話を聞く。『自分』の真横に立ち、正面にいる少女の表情をじつと見た。花見……とやや寂しげに『自分』が呟いたと同時にこはねの表情は少し曇った。いつもは上向く口角がやや下がり、心配や悲しみに似た感情を想起させられる。

だが、その表情はいつまでもは続かなかった。突然に眉が上がり、下がった口の端がきゅっと引き結ばれる。まるで何かを決意した時のように。そしてそれから普段のような笑顔で彼女は言った。『じゃあ、明日はちょうどお休みだし、ちよつと早めに練習始めて、終わったらお花見するのはどうかな!?』——当時の彼にはわからずとも今の彼にはわかる。一体どんな思いでこはねが花見を提案したのか。何を見て何を感じてそう言ってくれたのか。それに思い至った時、冬弥の

胸はまた強く締め付けられる感覚がした。

目を開くとがらんだ公園に一人彼は佇んでいた。空の向こうから夜がやってこようとしていた。側のベンチに腰掛け、背中を預ける。

『青柳くんの想いでできたセカイに繋がってる気がする』

『本繋がりが、か……』

ここに来る前こはねと会話したことが思い起こされる。

——ああ。きつとこの渡ってきたセカイもまた俺のセカイなんだろう。

不思議なセカイだが、妙に納得できた。

ずっと昔に読んだ本だ。タイトルに惹かれて手に取った。幼かった彼はその内容の全てを理解できたわけではないが、残っている言葉があった。

“大切なものは、目には見えない”

冬弥はもう一度目を閉じた。奥の方からゆっくりと

光が近づいてくる。それはあたたかくて、とても眩しかった。

＊

「——くん」

冬弥の耳に聞き慣れた声が飛び込んでくる。意識がゆっくりと浮上していく。

「……ぎくん……」

暗闇の奥にあった光は外界から差し込む陽の光に変わり目の奥を強く刺す。

「青柳くん！」

至近距離から今度こそはつきりとした声が聞こえて冬弥の知覚は急速に覚醒した。生理的な涙が滲む霞んだ目、何度かまばたきをして視界が落ち着いてきたところであろうやく声の主の輪郭が明瞭になった。

「小豆沢……？」

「青柳くん！ 大丈夫？ もしかして体調が悪いとか……」

冬弥を見上げる表情は心配に眉を思い切り下げている。彼はじつとこはねの顔を見つめた。その柔らかながら真摯な眼差しはしっかりと今の彼を見ていた。

「小豆沢」

「？ 青柳くん？」

帰ってきた、ようやく冬弥はそう思えた。それと同じに記憶越しの映像ではない生きた亜麻色の髪も薄茶の瞳も酷く懐かしく思え手が震えた。

「小豆、沢」

「え、わ……っ！」

腕を伸ばさずにはいられなかった。目の前に居る小豆沢こはねが本物であることをその手で確認せずには。突然の抱擁にこはねが目大きく見開いて白黒させる間に冬弥は腕の力を強くする。彼からは何の言葉もない、その代わりに息が詰まってしまいそうなくらいに

強い力だった。こはねから冬弥の顔を見ることはできない。だが今まで経験したことのない抱擁にこはねもまた何も言わずそつと広い背に腕を回した。小さな手がゆつくりと、丸まった背を撫でていく。その一動作ごとに感じる胸が締め付けられるような感覚の正体を彼はもう理解していた。もう一度冬弥は肺の奥底から彼女の名前を呼ぶ。だがそれはただ空気が漏れるばかりで音にはならなかった。その代わりに聞こえてくるのは彼の名前を耳元で呼ぶ穏やかな声。触れている、触れられている。鼓動を感じられる距離にいて、小さな口が自分の名前を呼ぶ。それら一つ一つに感じる思いを、冬弥は上手く伝えられるような言葉にできそうもなかった。けれども今自分が感じるあたたかさが、つい少しまで当たり前だと思っていたあたたかさが決してそうではなく、与えられて成り立っていたものだったのだと今の彼は知ってしまったている。

どれくらいそうしていただろう。冬弥の腕がようや

く緩んでこはねはふつと息を吐いた。

「小豆沢、俺は一体……どうしていたんだろうか」

「え？ えつと……写真展のゲートをくぐったところで青柳くんが立ち止まって……」

「それはどのくらいの時間だ？」

「うーん、そんなに経ってないと思うよ。三分くらいかな、でも何回声を掛けても返事が無かったから心配で」

三分。まさか自分が過ごした時間は何かの夢だったのだろうかと思ふ。三分なんて時間ではなかった、どれくらい続くかも分からない道を彼は彼女無しで歩いて来たはずだった。そうかと冬弥は言うことしかできない。

「体調は大丈夫？」

「ああ。……少し立ちくらみのようなものだったのかもしれない。心配をかけてすまない」

「そっか、じゃあもし途中で具合が悪くなったら言っ

てね。あのね、さっき向こうに電車が停まってるのが
見えたんだ。次の駅もすぐにあるみたい」

こはねの指が先の道を示す。

「そうか。なら、すぐに向かおう」

「うん！」

進むべき道の先へ首を動かすこはねの、帽子を抱えたままの手を見ながら冬弥は声を掛けた。

「小豆沢」

「？ どうしたの青柳くん」

「……手を繋いでくれないか」

また離れてしまうかもしれないのが怖いからとは言えなかった。そもそも自分が体験したことが事実だった証拠もない。それでも白昼夢にしては嫌にリアルだった。

「手？ うん、もちろんだよ」

理由も聞かず返って来るころよい返答に助けられた冬弥は左手を差し出そうとした。そしてその時初め

て自分が手を強く握っていたことに気づく。ゆっくりと開いた手の中を覗き込んで最初にあれ？ と声を上げたのはこはねだった。

「青柳くん、それって……」

「？ これは……」

ふっと風が吹いた。その風は冬弥の手の中から一枚の桜の花卉を舞い上げて彼等の行く先へと運んでいく。

「最初の花畑に、桜の花びらも混ざってたのかな？」

「……いや……」

「？」

あれは夢では無かったのだ。冬弥は花卉の行く先を眺めながら自身の胸の中の締め付けられる感覚を思い起こした。こはねもそれに倣い花卉の行く先を見守る。彼等の行く先を導くように風に乗った花卉は決して地には落ちない。

「追いかけてみようか」

「そうだな」

こはねが一步足を前に出した。その間に冬弥はふと後ろを振り返る。ゲートの外から微かに、中で展示されている写真が見えた。あの写真を見たときに感じたあたたかさは自分たちを見守っている人の気持ちでもあるのだろうけれど『それをちゃんと受け取る』こはねの心のあたたかさの表れだ——何故ならあの場所はこはねの想いでできたセカイなのだから。

冬弥の記憶に残っている、あの場所に飾られていた、こはねが好きだと言ってくれた彼の表情はどれも彼自身では知らない顔ばかりだった。こはねが自分を好きだと思って見てくれているのは彼にとって間違いなく嬉しいことだ。ただ、その事実以上に自分の色々な表情を心に留め置いてくれるあたたかさが、小豆沢こはねという人がいてくれることが何よりも嬉しいことなのだ。と今の彼は思う。自分が目を閉じて見て来たセカイが教えてくれた。仲間になってからずっと、付き合い前からもうずっと、自分の知らないところで彼女が

自分に向けてくれていたのは間違いなく『愛』だった。ただ彼の幸せを願う気持ちでしかない胸が締め付けられるほどあたたかで優しくて大きな『愛』に、自分が包まれていた事実を彼は知った。そして少しだけ苦しいことだけれど、その愛は決して彼だけに向けられるような類のものでもない。でもだからこそ愛おしい。好き、そばにいたい、頼もしい、それらは確かに彼の気持ちだ。だが今の彼にはあるのはそれだけではない。

大切だ。

大切——こはねは多くの人を、そしてその気持ちが伝わる一瞬一瞬を大切にしている。その気持ちが彼女の写真からは伝わる。だからこそ自分もそんな彼女こそを大切にしたい。誰かのことをこんなにも大切に思える彼女を、大切にしたい。

そばにいたい。だがそれ以上に、そばにどうかいさせてほしい。

自分の隣に小豆沢こはねがいること。そして彼女の隣に自分がいられること。そのどちらも、本来ただ望めば叶い与えられるような、当たり前前に得られることではきつとないのだと冬弥は強く思う。

——今俺達がお互いの気持ちが生み出すセカイを巡れているのは一つの偶然なのかもしれない。

だからこそこはねの気持ちたちが形を成してセカイを作るくらい強い想いを受け止めたいと願ってやまない。彼女が彼に向けてくれる愛へと報いるような。

「小豆沢」

冬弥はこはねの方に向き直る。声を掛ければこはねは足を止めた。

「あとでまた、写真を撮らせてくれないか」

「えっ……私の？」

「ああ」

ここに来るまでに通った彼のセカイは彼の過去から生み出されたものだった。

だがきつといつか、今の冬弥が生み出すセカイもあるだろう。それは一体どんな姿をして、どんな色をしているのだろうか、それは全く想像のできないことだ。でもきつとそこには、こはねへの色んな気持ちたちが色んな形になって存在しているんだらうと冬弥は確信を持って言える。

「うん！」

ただ写真を撮らせて欲しいと願っただけで、こんなにもあたたかな笑顔をくれる。この笑顔を大切にしたい、そしてそれだけじゃなく——決して失いたくない。

冬弥は大きく足を踏み出すとほんの一步で追いついた先でこはねの手を取った。自分よりも小さく、そして大きなものを掬い抱える手。不可能であるとはわかっていても、願わくばもう離したくはない。あんな思いをするのはもう充分だ。

「……行こう」

力強い声が、セカイに響いた。